

修士論文（要旨）

2018年1月

大学生におけるキャリア・パースペクティブの形成プロセスに関する質的研究

指導 種市 康太郎 教授

心理学研究科
臨床心理学専攻
216J4007
常見 恵里

Master's Thesis (Abstract)
January 2018

A Qualitative Study of the Process of Career Perspective Formation
in University Students

Eri Tsunemi

216J4007

Master's Program in Clinical Psychology

Graduate School of Psychology

J. F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Kotaro Taneichi

目次

第 1 章 研究背景	1
第 2 章 目的	1
第 3 章 方法	1
第 4 章 結果	2
第 5 章 考察	2
引用文献	3

第1章 研究背景

日本の新規大学卒業者（新卒）の労働市場には独自の採用・就職の慣行・制度がある（日本労働政策研究・研修機構，2007）。進路選択行動である就職活動で内定が取得できず、新卒採用の機会を逃すと、正社員として就職することが非常に難しいのが現状である。また若年者の早期離職や職場への定着の促進が重要な課題であり、若年者の初期キャリアにおいて、就職上のミスマッチが生じないためにどのような生き方をしていくか将来設計をしていくことが望ましい。そして、学生が安定した仕事に就くために、過去から現在そして未来を展望することで、自分の仕事に関する優先順位や価値観（キャリア・アンカー）をより明確に理解することが必要であると考えられる。

これまでの大学生の進路選択過程の研究では、進路選択に対する自己効力（安達，2001；富安，1997a）や時間的展望（富安，1997b）がその後の進路決定行動や肯定的な将来イメージと関連しており、進路選択過程では、現在，過去，未来に対する意味付けや捉え直しを繰り返しながら選択を行っている（奥田，2004；田澤，2002）。これは、職業選択に対してある程度の見通しをもつことで、積極的に進路選択を行うことができると考えられる。職業に対する将来の見通しは、金井（2000）がキャリア・パースペクティブとして捉えており、矢崎・金井・高井（2013）は、「自分の人生における職業生活を中心とした生き方の、明確かつ時間的な連続性を持った見通し」と定義している。これまでに、自己決定経験やキャリア・モデルの存在（金井・三後，2004）、進路選択に対する自己効力、進路探索行動（矢崎他，2013）、大学活動（鶴田，2013）、ソーシャルサポート（西分・児玉，2014）などが大学生のキャリア・パースペクティブ形成に有効であることが示されている。大学生の進路選択において、キャリア・パースペクティブの形成プロセスに焦点をあてることで、過去との時間的な連続性や変化の要因、キャリア・パースペクティブをもつ大学生の特徴などを捉えることができると考えた。よって、本研究では、未就職の大学生がキャリア・パースペクティブを得る背景にはどのような要因があるのか、キャリア・パースペクティブがどのように変化するのかを探索的に検討する。

第2章 目的

大学生におけるキャリア・パースペクティブについて、時系列的な変化のプロセスをインタビュー調査によって検討することを目的とする。

第3章 方法

予備調査では、就職活動を開始している本学の大学4年生（全学群）205名を対象に質問紙調査を行った。調査用紙は、矢崎・金井（2005）が作成したキャリア・パースペクティブ尺度とフェイスシートにより構成され、得点が高いものはキャリア・パースペクティブを高く持っていること意味している。キャリア・パースペクティブの合計点が上位3分の1に入る者をインタビュー対象者とした結果、男女22名を対象とした。インタビューは協力者1名に対して、1時間～1時間30分程度の半構造化面接を実施した。

分析は、木下（2007）の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下 M-GTA）を用いた。分析テーマは「大学生におけるキャリア・パースペクティブの形成プロセス」とし、分析焦点者は「キャリア・パースペクティブを形成した大学生」とした。

第4章 結果

M-GTA による分析の結果、104 個の概念、30 個のカテゴリー、10 個のカテゴリーグループが生成された。そして、生成された概念、カテゴリー、カテゴリーグループの関係性を検討して、ストーリーラインを作成した。以下、ストーリーラインを説明する。

学生生活では、大学入学前に、特定の職業に憧れを持ち、就きたい仕事を見つける。活動として、自分を変えるための行動で、親からの自立や他者への働きかけなどがある。大学の活動では、苦手なことや辛い経験を乗り越えながら、プラス思考で積極的に活動しており、活動内容は、幅広い学生活動が進路選択に役立っている。仕事の価値観は、幅広い他者との関わりから、自身の欲求を認識する。就職活動では、進路選択のための自己理解、他者への相談などから始まり、これまでの経験を基に適職を探索しながら、この仕事は自分にできると確信をもつ。また、現実的に進路を選択する人がいる一方で、適職につくことへの不安や焦りを感じる人もいる。卒業後の仕事の見通しでは、経験から自身がやりがいや喜びを感じる仕事場面やキャリアステップを想像する。仕事でのあり方では、職場やお客など周りを意識した振る舞いや活躍をイメージしている。また、仕事への取り組み姿勢は、楽しむ気持ちやプラス思考で、自分の経験や特性が仕事で生かせるかイメージする。新卒で入社した企業での勤続年数については、定年まで働くことを希望する人、働きたい意志はあるが、状況次第で転職を考える人、新しい経験を期待して転職を考える人がいる。

第5章 考察

本研究の結果と先行研究による知見との比較をした結果、キャリア・パースペクティブをもつ大学生の特徴として、以下のようなことが確認された。

大学入学前では、将来の仕事を意識した大学選択をしており、その場合、どの大学が将来の仕事にとって有効か考える。授業のコースを選ぶ、職業選択をするなどの大学時代の進路選択では、親と衝突することがあり、自己決定経験には、親からの影響も関連している場合もある。大学生活では、先行研究で調査した大学活動の項目よりも幅広い活動が将来の仕事探しに影響していることがわかった。これらの活動に共通して、プラス思考をもっており、新しい課題に積極的に取り組む行動力がある。また、キャリア・パースペクティブの意識が高い大学生は、進路探索行動でも積極性があり、進路選択の過程の中で自己効力感をもつと考えられる。将来の見通しでは、職業選択において、自分に意識が向いた価値基準を軸に職業選択をするが、卒業後の見通しについては、周りから頼られたい、人から感謝されたいなど社会的評価を主軸において将来の見通しをもつと推察される。

今回の研究では、大学生におけるキャリア・パースペクティブの形成において、将来の仕事の見通しを考えたり、自分に合う仕事探しをするための経験や機会が得られたりするきっかけは、就職活動だけでなく、学内活動や学外活動など幅広い場面で得られることが明らかになった。大学のキャリア支援などでは、就職活動の直接の支援だけではなく、様々な大学生活での活動や経験ができるように支援し、それらの活動や経験から個人の価値観や特性を見出していけるように話を聞く積極的な関わりが必要だと考える。

引用文献

- 安達智子 (2001). 大学生の進路発達過程——社会・認知的進路理論からの検討—— 教育心理学研究, 49, 326-336.
- 金井 篤子 (2000). キャリア研究における発達の視点の意義 小嶋 秀夫・速水 敏彦・本城 秀字(編) 人間発達と心理学 金子書房 pp.82-89.
- 金井 篤子・三後 美紀 (2004). 高校生の進路選択過程の心理学的メカニズム——自己決定経験とキャリア・モデルの役割—— 寺田 盛紀(編) キャリア形成・就職メカニズムの国際比較——日独米中の学校から職業への移行過程—— 晃光書房 pp.25-37.
- 木下 康仁 (2007). ライブ講義 M-GTA——実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて—— 弘文堂
- 日本労働政策研究・研修機構 (2007). 大学生と就職——職業への移行支援と人材育成の視点からの検討—— 労働政策研究報告書, 78.
- 西分 翔太・児玉 真樹子 (2014). 大学生のキャリア・パースペクティブ形成に及ぼすソーシャルサポートおよびメンタリングの効果の検討 学習開発学研究, 7, 19-27.
- 奥田 雄一郎 (2004). 大学生の語りからみた職業選択時の時間的展望 大学院研究年報(中央大学大学院), 33, 167-180.
- 田澤 実 (2002). 職業選択時における大学生の自己効力 大学院研究年報(中央大学大学院), 31, 347-359.
- 富安 浩樹 (1997a). 大学生における進路決定自己効力と進路決定行動との関連 発達心理学研究, 1, 15-25.
- 富安 浩樹 (1997b). 大学生における進路決定自己効力と時間的展望との関連 教育心理学研究, 45, 329-336.
- 鶴田 美保子 (2013). 女子大学生の就職活動におけるプロアクティブ・パーソナリティの役割 金城学院大学院 人間生活学研究論集, 9, 15-27.
- 矢崎 裕美子・金井 篤子 (2005). キャリア・パースペクティブ尺度作成の試み 日本社会心理学会第46回大会発表論文集, 308-309.
- 矢崎 裕美子・金井 篤子・高井 次郎 (2013). キャリア・パースペクティブとその形成要因としての進路探索行動——大学生を対象とした短期縦断的検討—— キャリア・デザイン研究, 9, 167-177.